

Homage

Professor Emeritus Kazuo Hara (1929-2022)

去る2022年2月28日、教育研究所所員であられた
原一雄名誉教授が逝去されました。

研究所といたしまして、ここに謹んで哀悼の意を表します。

Professor Emeritus Kazuo Hara, former member of IERS,
former Professor of Psychology, passed away on February 28, 2022.

IERS expresses its condolences.

原一雄先生を悼む

In Homage to Professor Kazuo Hara

栗山 容子 KURIYAMA, Yoko

● 教育研究所顧問

Adviser of Institute for Educational Research and Service

原先生は小学校の教師としてキャリアを始められ、またそれ故、直、アメリカに渡られて学業を積まれたと聞いている。先生のことばは明瞭でわかりやすく、順序だって説明される。それはこの時の経験によるのだろうか。私が先生を想うとき、先生はいつも教師の顔をされている。

70年代終わり近く、私が心理学研究室に着任した当時、教員は原一雄先生（神経・生物・行動）、故星野命先生（社会・文化・臨床）、故都留春夫先生（ガイダンス・臨床）の3人。それぞれ心理学専門領域の研究・教育ではいうまでもなく、すでにICUの大学行政にも貢献されていた。原先生の面影を追いながら、次に3つのことを記したい。

先生方に週1回はデパートメント会議で顔を合わせる。最初の戸惑いはこの会議での議論から。いきなり、SAT云々、私にはさっぱりわからない略語、報告や提案、議論などが始まる。それぞれの立場を考えると、議論が白熱を帯びるのは必須である。中でも繰り返し議論して心に残るのは、心理学のディシプリンを、限られたマンパワーで、心理学のプログラムにどこまで実現するかの課題だった。

原先生の専門領域では実験心理学的な方法一言い換えれば科学的なアプローチによる証拠を積み重ねる厳密な思考法が重視される。対して、もう一つの領域である臨床的なアプローチでは一個人一回限りの心理現象を対象とする。そのために説明的にならざるを得ない。統計的手法など論外で、考え方の根本が相互に受け入れ難いものになる。マンパワーを含め、教育プログラムに具体化するための難しさも加わる。若輩はうろろする

ばかりだ。

原先生には実直、質実剛健ということばが相応しい。実践に先立ち綿密な計画のもとに実行に確実に移していく*。認定心理士の資格認定のガイドラインに関わる関係上、「できない」は認められない。その対応にはどうしても厳しくなる。できないものはできない、と言わしめてしまう。周りはずいぶん気遣ったと思うが、教師の顔ははっきり見えた。ここでの議論は私たち次世代の心理学プログラム作成の指針になった。

第2に、会議で飛び交って慌てさせられたSAT—ICU入学選抜試験の一つは、原先生の大学への貢献そのものである。現在ICUの入試は選抜の多様化に応じて随分と変わったが、旧方式のSATは、米国の一般学習能力検査を原先生がICUの入試の一つに導入、責任者として関わっておられた。領域別に多肢選択問題を多数出題して合計点で合否決定する。問題作成が選抜試験の良し悪しを決める。そのためには良問を多数、準備しなければならない。当時、心理学研究室の重要な業務の一つで、決められたメンバーが、指標に照らして各問を吟味し、表現に工夫をして良問（と予想する）の選抜問題に仕上げる。実施後には統計的な手法によって分析し、検討を加えて次の問題作成に生かす。秘匿の作業である。この関連資料は3段のキャビネットに年度ごとに整然とファイルされていた。このキャビネットは先生が退職された後、私の部屋に移されることになる。先生の背中を見ながら、多くを学んだ。教育評価に関わる技術は日々進歩する。が、その源泉は原先生にある。ICU教育研究所で準備してくださった原先生ご自身の講義記録、「私の教育評価論—個人史を

綴りながら―」（『教育研究』36（1994）pp.1-35）に詳しい。

原先生の顔が見える第3の仕事は一連の価値観研究である。1961年、Troyer教授の下、アクションリサーチとして大学生（ICU）の価値観研究が始まる。まもなくTroyer教授が帰任され、その後原先生の主導で学部生、大学院生が加わって一連の定点的な長大な縦断的研究へと進展、幾つもの論文が発表された。博士の学位を取得した院生も現れた。その一人、大井直子さんと共に、この研究を引き継ぐことになるとは思っていなかった。

国際基督教大学21世紀COEプログラムの研究プロジェクトの一つとして、研究費の支援を得ることになった。2004年から大学生の価値観・価値意識の縦断的研究が継続して行われることになり、これまでの調査研究に加えて、臨床法の一つ、面接によるデータの収集と分析も実施して研究を展開した。これは、先述した心理学の根源的な2つの流れの一種の融合体と言えるかもしれない。長期にわたる研究の難しさを痛感しながらも、価値観研究に関わることで、原先生の顔をしっかりと見ることができたと感謝している。

ある時、ERBI（教育研究棟I）のラウンジー外観から金魚鉢とも一の大きなガラス面、その際のステップに観葉植物の鉢がいくつも並んだ。ちょうど水草が浮遊しているように……原先生が持ち込まれて、水やりなど、手入れをされていると聞いた。一方、ERBIIの北側に動物小屋があつて実験用のネズミが飼育されていた（と、聞いている）。原先生の研究のためのもので、他にも研究室にはホルマリン漬の動物たちがいた。私には近寄り難いところだったが、毎年、餌代の予算獲得に心を配っておられた。ラウンジの使用や防災のため、金魚鉢の植物たちはしばらくして姿を消した。ラウンジが殺風景になって寂しくなった。人間よりも動物が、動物よりも植物が、素直でいい、と生き物を好まれたという先生の愛情深い一面を思い出す。

退任されてから、心理学研究室史の編纂（創設30周年・55周年記念文集合本『こころの面影』2011年）に奔走された。その作業のために何人

かの卒業生やスタッフが野崎の原先生のお宅に集まったことがある。数種のスパイスをつけた骨付ラム肉のローストを振る舞われた。その微妙な美味と香りはアメリカ風だった。

昨年の今頃、原先生からご子息の突然の死を知らせる喪中ハガキが届いた。ハワイに在住、仕事をされていた。コロナ禍の渦中でのこと、先生の御心痛はどれほどのものだったか、計り知れない。ご家族を愛されていた。どこにお出かけになっても、奥様のいらっしゃる方に足を向けて眠れないとも… ご冥福を心からお祈りする。

*参照した講義録では、天城勲先生の“Plan, Do, See”のことばを、先生ご自身で紹介している。「―まずは教育目標を設定し、次に実施の手段を選び、実行後の結果について謙虚に反省し…」

